

中巖圓月の宋詞紹介

野 川 博 之

序章 『文明軒雜談』の構成

筆者は本誌所掲の前稿「五山二留學僧の填詞製作」第二章にて、一節を割きつつ中巖圓月（一三〇〇—一三七五）がなした宋詞紹介の先驅性に言及した。本稿では、この問題について、さらに考察を進めたい。前稿で見たように、中巖の現存作品中には、「木蘭花第二體」の詞牌による填詞一首が確認されている。これは元に留學中の青年期の製作と見られるが、歸國後の彼は、填詞に對し、引き續き一定の關心を保持していたものと見られる。その證左をなすのが、隨筆集『文明軒雜談』上卷に認められる都合四箇條の填詞關聯の諸項である。

本書は上・中・下の三卷から成るが、二つある現存本ではいずれも上卷の首部と下卷の尾部とが失われている。したがっ

て、中巖が本書撰述の主旨を展開したであろう序、もしくは跋は、これを今や讀むことはできない。玉村竹二博士は、本書を校訂し『五山文學新集』第四卷に收録するに際して、現存條文に洋數字の番號を付した。本稿においても、この番號に據る。

今般筆者が全體を通讀した印象では、（一）中巖の留學時代の見聞や、（二）歸國して大友氏の外護のもと、いくつかの寺院住職を歷任していた閑の體驗、（三）年來の讀書を通じて知ったとおぼしい、唐・宋を中心とする中國文學史上の逸話——これら三者のいずれかに關する事項が、一見雜然と書き連ねられている。この點、製作年代がはつきりしている『藤陰瑣細集』と同様である。兩者ともに久しく刊刻を見なかったが、中巖有縁の寺院では、開祖の文藻の一翼をなすものと

して、缺落を生じつつも傳寫されてきた。⁽³⁾ 中巖が兩者を撰述するに際し、いかなる人々を具體的な讀者として想定していたのであるか、現存する本文中には何ら明記を認めないのであるが、現存するどの項目にも、未定稿的な字句は見當たらないから、自己の門人たちに披見され、中巖の有力な傳記資料とされることは、少なくとも想定していたのではなからうか。

さて、(一) 及び (Ⅲ) に屬する條文についていえば、同じテーマをそれぞれ違った角度から扱う數箇條が、概して一群をなしている。本稿で取り上げる填詞關聯の項目四箇條も、その例外ではない。當該テーマに關する中巖自身の所見は、おむね簡略である。中國佛教もしくは中國文學に關する彼の知識の披瀝に、本書及び『藤陰瑣細集』の主眼はあくまでも置かれているかのようである。しかしながら、簡略な所見であつても、これらを集成すれば、禪學及び詩文の研鑽における中巖の志向性の所在が、より明瞭にあぶり出されよう。本稿で取り上げる四箇條は、内容的には (Ⅲ) に屬しているが、その基礎をなす知識は、より具體的には彼が披見した宋代の復數の詞話によつて得られたものとおぼしい。宋代詞話のわが國での流傳狀況はなお判然としないが、同時代の他の禪僧たちに比すれば、中巖の研鑽ぶりは、その積極性において群

を抜いているようである。

中巖よりも一世紀前に生まれた日本曹洞宗の開祖・道元(二〇〇—一二五三)には、「十二時歌」(敦煌文書以來の久しき歴史を有する詞牌)の題目のみを借用した七言絶句一二首が傳えられている。⁽⁵⁾ 以後一世紀の間に、南宋の滅亡や元寇といった大きな事件があつたけれども、日中兩國の交流は途絶えるどころかますます發展を遂げており、この間、中國からわが國へは、書物をも含めて數々の文物が移入されたものとおぼしい。にもかかわらず、わが禪僧たちは、神田喜一郎博士の先行研究に據れば、⁽⁷⁾ 前出の道元のように、その偈頌製作に際して、いくつかの詞牌のみを借用して自作(もしくは自著)の題目に充てたり、あるいは詩序の中でごく手短にそれら詞牌に言及するに留まつているのである。

こうした狀況下、中巖が填詞を實作した青年期から『文明軒雜談』で宋代填詞を紹介した老境に至るまで、⁽⁸⁾ 久しきにわたつて填詞への關心を失わなかったことは、やはり注目すべき事實であると言えるのではないか。

第一章 宋詞紹介諸項の構成

『文明軒雜談』で中巖が詞話に依據しつつ宋詞を紹介しているのは、³⁹⁸ 401條である。順を逐つて各條の概略を示せば、まず³⁹⁸條では、蘇軾（二〇三六——二〇二）の填詞「念奴嬌」を、二つの詞話に依據しつつ紹介している。残る三箇條では、柳永（一一〇三四）の填詞について述べているが、このうち最初の³⁹⁹條では柳永の「醉蓬萊」について、次の⁴⁰⁰條では「醉蓬萊」（前出）・「透碧霄」・「八聲甘州」について、それぞれ關聯する逸話ないし評語を、複数の詞話から引いている。

終わりに、⁴⁰¹條は³⁹⁸條以下三箇條全體の總結をも兼ねている。すなわち、宋代の禪林における柳詞盛行の一斑を南堂元靜（二〇六五——二三五）の事蹟に認めつつ、柳詞をも含めた世俗の文藝に禪僧が魅了され、自己の說法に文藝の香氣を添えんとして汲々としつつある状況をば、「半文の錢にだに直せず。只だ是れ業識の増長なるのみ。」とまで批判する。どうやら中巖は、この一言を言わんがために、前三箇條を費やして宋詞を紹介したようにも見受けられる。

もとより中巖は、一般的には五山文學の旗手と目されている。しかしながら、彼自身は純然たる禪者としての立場から、

中巖圓月の宋詞紹介（野川）

同時代（及び前代）の禪僧が詩文に耽つて、本務たる禪道をややもすれば閑却視していた状況を好ましく思つておらず、そうした思いがかかる言辭となつて表出したのではなからうか。

第二章 蘇軾填詞の紹介

中巖は³⁹⁸條で、蘇軾の填詞に關する宋代の評語を次のとおり引用・紹介している。^{①②}

晁無咎云、東坡之詞、人謂不諧音律、然其橫放杰出、自是曲子中、縛不住者、^① 漁隱叢話云、赤壁懷古、念奴嬌之辭、語意高妙、眞古今絕倡也。^②

晁無咎云く、「東坡の詞は、人、『音律に諧はず』と謂へり。然れども其の橫放杰出せること、自からはれ曲子中の縛せども住せざる者なり。」と。^①『漁隱叢話』に云く、「赤壁の懷古 念奴嬌」の辭は、語意高妙にして、眞に古今の絶倡なり」と。^②

本項は、二つの詞話からの引用を合成したものである。まず傍線①は、「蘇軾の填詞はややもすれば音律を無視しがちで

ある」という世評に對し、門人の晁補之（一〇五三—一一一〇、字は無咎）が、師の填詞は「（其の横放杰出）している點に一大長所があり、これは（曲子中の縛せども住せざる者）なのだ（から多少の音律的逸脱など、論ずるに足るまい）」と辯護する内容である。以上は吳曾（北宋末—南宋初の人）の『能改齋漫錄』卷一六からの引用と確認された。¹⁰

次に、傍線②は、中巖自身が明記しているとおり、胡仔（前出・吳曾と同時代人）の『漁隱叢話』前集卷五九からの引用である。¹¹ただし『叢話』原文では、中巖のいわゆる「赤壁懷古・念奴嬌之辭」を「東坡大江東去、赤壁詞」（讀點筆者）に作っている。つまり、原文では當該蘇詞の首句（大江東去）と詞題とを擧げていたのを、中巖は引用に際して首句を削除し、代わりに所用の詞牌（念奴嬌）を補ったのである。

蘇軾の「念奴嬌 赤壁懷古」は、從來蘇詞中の傑作と目され、久しくいわゆる豪放派の代表作例と稱されてきた。¹²終生禪を好んだ蘇軾の詩文は、わが五山にあつても大いに持て囃され、玉村博士編纂の『五山文學新集』諸卷では、隨所にその名や詩文の作題、もしくは逸話を認める。詩文ほどにはわが國民との親縁性を有しない填詞ではあるが、禪者による蘇詞の請來は比較的古く、その年代的上限は仁治元年（一二四〇）、

下限は北朝の文和二年（二三五三）と見られる。¹³したがって中巖の時代のわが禪林には、この「念奴嬌」の詳細は知らずとも、題のみならば知っているという者は、既に存在したように見受けられるのである。

第三章 柳永填詞の紹介

（一） 著名作品と關聯逸話

柳永の填詞を紹介する399條以下三箇條のうち、前二箇條は彼の著名作品と、それらに關聯する逸話との紹介に充てられている。我々は現在、柳詞に關しては二つの依據すべき專著を有している。刊年の古い順に擧げれば、わが國の宇野直人博士の『中國古典詩歌の手法と言語——柳永を中心として——』と、中國の薛瑞生教授（西北大學）の『樂章集校註』とである。前者は、先般中國でその譯書が刊行された。¹⁴

さて、中巖はまず399條で「醉蓬萊」を、次いで400條で同じく「醉蓬萊」に加えて、「透碧霄」¹⁵と「八聲甘州」¹⁶とを擧げ、その傍ら、關聯する逸話、もしくは評語を紹介する。宇野博士は、三首それぞれの題材について、「醉蓬萊」は「皇帝への」頌詞」であり、「透碧霄」は「都邑再訪」であり、そして「八

聲甘州」は「羈旅——佳人を思う」であると判じている。⁽²⁰⁾

中巖は399・400の二箇條にわたって「醉蓬萊」の詞題を擧げているが、現存する柳詞で、この詞題を持つものは、「漸亭皋葉下」の首句を有する一首に留まる。⁽²¹⁾ また、中巖は「八聲甘州」に關しては、作中の佳句並びに蘇軾の評語を引用するに留まり、詞題を明記していない。以下、條を逐いつつ、中巖が依據した宋代詞話を究明しよう。關聯性が濃厚であるから、右記二箇條は併掲したい。⁽²²⁾

399條

柳三變、遊東都南北巷、作新曲、天下詠之、遂傳禁中、仁好其辭、對酒必使傳【侍】※奴歌之再三、三變聞之作宮詞、號醉蓬萊、因宮官達後宮、且求其助、仁宗聞而覺之、自是不復歌其詞、會改官制、以無行黜之、後改名曰永、

柳三變、東都の南北の巷に遊び、新曲を作り、天下之を詠ず。遂に禁中に傳ふるに、仁庶、其の辭を好み、酒に對せば必ず傳【侍】※奴をして之を歌ふこと再三ならしむ。三變、之を聞きて宮詞を作り、「醉蓬萊」と號し、宮官に因つて後宮に達し、且つ其の助を乞ひたり。仁宗聞きて之を覺り、是れより復た其の詞を歌はず。會々官制

中巖圓月の宋詞紹介（野川）

を改むるに、行なきを以て之を黜く。後、名を改めて永と曰へり。

原文に【侍】※とあるのは、丹波法常寺本の用字である。この異本に見える用字について、玉村博士は「底本〔引用者註：史料編さん所藏本〕の文字よりすぐれて採るべきものは【】の下に※印を附して、讀者の判斷に便し」と述べている。⁽²³⁾ 因つて筆者は、當初ここが「侍」字に作られていたものと見たい。

400條

永、字耆卿、精樂章、入内（一）都知史某者愛其才、會教坊進新曲醉蓬萊、時司天臺、奏老人星現、史奏、乞命永撰辭、以頌休祥、柳自（以）爲得意、然晨遊鳳輦、適與眞宗挽辭同語、仁宗不懌、故竟不推恩久之、⁽³⁾ 永又作透碧霄、有寶運當千、史又稱於上、上曰、寶運當選、非嘉語、⁽⁴⁾ 東坡云、世人言、柳耆卿曲俗、非也、霜風淒緊、關河冷落、殘照當樓、此語於詩句不減唐人高處、⁽⁵⁾

永、字は耆卿、樂章に精し。入内都知・史某といふ者、其の才を愛す。會々教坊、新曲「醉蓬萊」を進む。時に司天臺、老人星現れたりと奏す。史、奏して永に命じて辭

を撰び、以て休祥を頌せしめんことを乞ふ。柳自ら以て意を得たりと爲す。然るに「晨遊鳳輦」は、適々眞宗挽辭と語を同じくす。仁宗憚らず、故に竟に恩を推さざることをを久しうす。^③永又た「透碧霄」を作るに、「寶運當千」あり。史又た上に稱す。上曰く、「『寶運當選』は嘉語に非ず。」と。^④東坡云く、「世人の『柳耆卿の曲は俗なり。』と言ふは非なり。『霜風淒緊、關河冷落、殘照當樓』、此の語、詩句に於いて唐人の高處に減ぜず。」と。^⑤

原文傍線③に見える（一）は、『五山文學新集』本には施されているが、この部分の出典とおぼしい王闢之『渾水燕談錄』に施された呂友仁氏の標點に依據し（後出）、これを削除したい。

呂氏の標點にしたがえば、ここの句意は、柳永が（入内）したのではなく、教坊の（入内都知）（官名、歌師）たる（史某）の意である。また、同じく原文傍線③に見える（以）字は、『新集』本では行の中央の白圈の右傍に、小字にて記されている。

399條並びに400條の傍線③・④で紹介された逸話では、北宋の仁宗皇帝が登場する。まず399條は、『後山詩話』（全一卷）に依據したと見られる。同書は北宋の陳師道（一〇五三—一一〇

一）の原著に係るが、現行本には、彼の歿後に別人が増補した部分が認められるという。^②さて、『後山詩話』の當該項目は、左記のとおりである。

柳三變。游東都南北巷。作新樂府。軌骸從俗。天下詠之。遂傳禁中。仁宗頗好其詞。每對^⑥必使侍從之歌之再三。三變聞之作宮詞。號醉蓬萊。因內官達後宮。且求其助。仁宗聞而覺之。自是不復歌其詞矣。會改京官。乃以無行黜之。後改名永。仕至屯田員外郎。

（句點筆者）

また、第二章前出の胡仔『漁隱叢話』では、その前集卷五九にて、この説話をほぼ忠實に引用している。ただし、文字には若干の異同が認められ、この異同あるがために、筆者には中巖が直接『後山詩話』から引用したのではなく、實は『漁隱叢話』を介して轉引したように見受けられるのである。

後山詩話云。柳三變。游東都南北巷。作新樂府。軌骸從俗。天下詠之。遂傳禁中。宋仁宗頗好其詞。每對酒^⑧必使侍妓^⑨歌之再三。三變聞之作宮詞。號醉蓬萊。因內官達後宮。且求其助。後仁宗聞而覺之。自是不復歌其詞矣。會改京官。乃以無行黜之。後改名永。仕至屯田員外郎。

（句點筆者）

三者の用字を對照するに、まず中巖が399條で〈對酒〉に作っているのに對し、『後山詩話』原文は〈每對〉に作り（傍線⑥）、『漁隱叢話』に見る轉引文は〈每對酒〉に作る（傍線⑧）。また、中巖が〈侍奴〉（二）※印、前出・法常寺本の用字）に作っているのに對し、『後山詩話』の原文は〈侍從〉（傍線⑦）に作り、『漁隱叢話』での轉引文は〈侍妓〉に作る（傍線⑨）。ただし中巖は、『漁隱叢話』によって『後山詩話』を轉引するに際し、〈妓〉字（傍線⑨）を誤認し、これと字形が相似する〈奴〉字に作ったのではなからうか。

次に400條では、傍線③に關しては、前出・王闢之（二〇三一—？）の『澠水燕談錄』（以下、『澠水錄』と略稱）に依據したとおぼしい。同書の刊本で、我々が現在比較的容易に披見し得るものとしては、前出・呂友仁氏の標點・校訂に係る『唐宋史料筆記叢刊』所收本と、『四庫全書』所收本とが挙げられる。それぞれ信頼すべき古本に據って作成されたものではあるが、後者は前者をずっと削除した形を示している。すなわち、後者が單に〈入内都知史某〉の助力で、柳永が自作上進を實現したことまでを伝えるのに對し、前者はさらに進んで、せっかく上進を實現したものの、期待に反して皇帝の不興を買ったことをも記し、かつ、不興を買った字句と不興の

理由とが一一列擧されている。

『澠水錄』には複数の異本が現存し、その成立過程については、究明すべき課題がなお認められよう。これを究明するうえで、中巖による引用の存在は、有力な手掛かりをなしているのではないか。ひとまず今回は、『唐宋史料筆記叢刊』本に見える當該項目を掲げたい。^⑩

柳三變、景祐末登進士第、少有俊才、尤精樂章、後以疾更名永、字耆卿。皇祐中、久困選調、入内都知史某愛其才而憐其潦倒、會教坊進新曲醉蓬萊、時司天臺奏：「老人星見。」史乘仁宗之悅、以耆卿應制。^⑪耆卿方冀進用、^⑫欣然走筆、甚自得意、詞名醉蓬萊漫、比進呈、上見首有「漸」字、色若不悅。讀至「宸游鳳輦」、乃與御製《眞宗挽詞》、暗合、上慘然。又讀至「太液波飜」、曰：「何不言『波澄』！」乃擲之於地。永自此不復進用。

『四庫全書』本では、傍線⑩を「史乘機薦之。仁宗大悅。」に作り（句點筆者）、これでしめくくりとする。傍線⑪以下引用文末尾までの訓讀は、宇野博士前掲書九八頁に掲げられている。また、同博士は、この逸話（及び中巖不引用の類話）の信憑性について、「天子や宰相が登場するものである以上、全く

の捏造として否認し去ることは無理であろう。」とも論評している（同書九九頁）。

ところで、『漁隱叢話』後集三九卷では、現代では散逸した『藝苑雌黃³⁴』から、同趣旨の逸話を引用している。しかしながら、こちらは同じく「醉蓬萊」の詞句の中でも、具體的には「宸游鳳輦」の句のみが皇帝の不興を買った、と傳えている。他の二箇所の字句については、その存在を「始用漸字。終篇有太液波瀾之語。」と記すばかりであり（句點筆者）、これらがまた皇帝の不興を買った、とまでは明記していないのである³⁴。

したがって、文面の相似という點からすれば、中巖はやはり基本的には『澠水錄』に依據しつつ、若干の取意をまなしたのではないだろうか。

ここで問題となるのが、400條の傍線④である。『澠水錄』本文に出入があることは既に述べたが、この傍線④は、あるいは既に散逸した同書異本の一部ではなからうか。〈永又作……〉史又稱於上……上曰……云々と、〈又〉字を疊用している點には、『澠水錄』からの引用文たることが明白な傍線③との強い關聯性が認められよう。また、登場人物の顔觸れ（柳永・歌師の史某・上（仁宗）や、人を介して填詞を上進したが、期待に反して皇帝の不興を蒙るという状況は、傍線③と全同して

おり、これは傍線④が異本佚文たることの傍證をなしているのではなからうか。

柳永の「透碧霄」は現存するものの、『全宋词』も薛教授『校註』も、ともに「寶運當千」に作る³⁵。したがって、これを皇帝が「寶運當選」と換言したのは、本逸話製作者の創作であろう。「寶算よ、千歳なれ。」と詠じた柳永であつたが、皇帝は故意か偶然か、そうは受け取ってくれず、「柳永が寶算を思いのままに延促する」の意に解し、不興を覺えてしまったのであろう。

ちなみに、薛教授『校註』では、著名な作品に關しては、歴朝の詞話に見える評語を集成・列舉しているが、「透碧霄」に關しては、そもそも集評欄自體を設けていない。宇野博士前掲書も、本逸話は掲げておらず、したがって、これの出典究明は、今後の課題とならう。終わりに、400條の傍線⑤については、中巖は、北宋の趙令時（二〇五一—一三四、宋の宗室）の『侯鯖詩話』に依據したとおぼしい。すなわち、同書卷七には、次のとおり記されている³⁶。

東坡云。世言柳耆卿曲俗。非也。如八聲甘州云。霜風淒緊。關河冷落。殘照當樓。此語於詩句不減唐人高處。

（句點筆者）

第二章前出の吳曾『能改齋漫錄』卷一六では、卷頭、右記の評語を蘇軾ではなく、その門人たる晁補之のものとしている³⁷。しかしながら、ここはやはり蘇軾の友人たる趙令時に措信して、蘇軾の評語と見るべきであろう。もとより中巖は『能改齋漫錄』からも引用しているが（第二章既述）、中國文學研究者としての見識から、ここではより多く史實を傳える文獻に據つたものと見られる。

(二) 宋代禪僧の柳詞耽溺

401條では、簡略ながら宋代禪僧の柳詞耽溺の史實を紹介し、かつ批判している³⁸。その禪僧とは、北宋末—南宋初の南堂元靜（第一章前出）である。これ一例のみではあるが、宇野博士前掲書（世俗社會での柳詞の盛行状況を紹介）と相俟つて、宋代の柳詞盛行に關する好史料をなしている。

藏叟（善珍）和尚、跋慶（懷慶）雲谷錄尾云（一）南堂說法、或誦賁休山居詩、或唱柳耆卿（柳永）歌、謂非說法可耶。³⁹ 礪陰（敬叟居簡）師祖所謂順朱朱順、⁴⁰ 亦此意、如今諸方長老、以明日上堂、一夜思量得、花簇【簇】※々、錦族【簇】※々、⁴¹ 不直半文錢、只是業識增長耳、

中巖圓月の宋詞紹介（野川）

藏叟（善珍）和尚、慶（懷慶）の『雲谷錄』の尾に跋して云く、「南堂の法を説くに、或いは賁休の山居の詩を誦し、或いは柳耆卿（柳永）の歌を唱ふ、法を説くに非ずと謂ふも可ならん。」と。⁴⁰ 礪陰（敬叟居簡）師祖の所謂「朱に順ぜば朱順ず」⁴¹とは、亦た此の意なり。如今諸方の長老は、明日の上堂を以て、一夜思量し得たるも、花簇【簇】※々、錦族【簇】※々にして、⁴¹ 半文の錢にだに直せず。只だ是れ業識の増長なるのみ。

原文の○内に記された人名註は、玉村博士の手になる。同じく原文の（一）は、讀解の便宜上、筆者が補つたものである。また、傍線④に見える【簇】※二箇所は、前出・丹波法常寺本の用字であり、玉村博士が底本のそれにもまさと判じたところである。

傍線②に見える慶（懷慶）の『雲谷錄』とは、南宋末期に活躍した臨濟宗の雲谷懷慶（生歿年未詳）の語録である。現在では國書刊行會版『新纂大日本續藏經』第七三卷に收録されており、その跋はいかにも藏叟善珍（二一九四—一二七七）の手になる（同卷四四四頁a—b）。執筆年は「戊辰」とのみ記されているが、筆者たる藏叟の生歿年代から南宋の咸淳四年（一

二六八)と推斷される。當該箇所は、より正確には次のとおり。

南堂說法。或誦貫休山居詩。或歌柳耆卿詞。謂之不是禪可乎。

これに續けて藏叟は、「近世尙奇怪生矯。苟見處不逮古人。如優場演史。談劉項相似事。(訓讀：近世尙ほ奇怪にして矯を生ず。苟も見處の古人に逮ばざるに、優場に史を演じ、劉・項〔劉邦・項羽〕相似の事を談ずるが如し。)」と説き、南堂元靜(以下、元靜と略稱)に始まる禪僧の詩歌愛好の風潮に對し、強い批判を加えているのである。

ここで『續傳燈錄』卷二五所掲の元靜の傳記を見るに、そこに列擧された彼の機緣語(悟りの境地を示す言葉)や法語には、多數の七言句が認められる。かつ、それら七言句は、おおむね二四不同・二六對(近體詩の鐵則)を遵守しており、元靜の平素の詩學研鑽ぶりが推知される。元靜が柳詞と竝んで愛誦していたという〈貫休の山居の詩〉とは、唐末の詩僧・貫休(八三二—九一二)の『禪月集』に見える、七律二四首の連作を指しているよう。⁽⁴⁰⁾『宋高僧傳』卷三〇所掲の貫休の傳記に據れば、老後を蜀で過した貫休は、詞人・韋莊(八六三—九一〇)や道士・杜光庭(八五〇—九三三)と交遊があったとい

う。⁽⁴²⁾ただし、實際の元靜は、單に詩詞を愛誦していたばかりではなく、弟子の化導にも頗る熱心であった。いわゆる「元靜十門」の教則は、優れた師家としての彼の姿を偲ぶよすがをなしている。⁽⁴³⁾

さて、筆者は傍線⑬を求めて、敬叟居簡(一一六四—一二四六)の代表的な語錄『北磻居簡禪師語錄』(全一卷、『新纂大日本續藏經』第六九卷所收)を通覽したが、得られなかった。あるいは彼の他の語錄(『北磻文集』・『北磻詩集』・『北磻外集』)に見えるのかも分らない。これは今後の課題としたい。傍線⑬の句意は、要するに惡習に馴染むと、いつしか第二の天性と化して、やめるにやめられぬということであろう。

傍線⑭は、北宋末期成立の臨濟宗の根本聖典『碧巖錄』に二箇所まで見える文言である。原典たる同書では、「簇」字に作っている。⁽⁴⁴⁾玉村博士が底本の「簇」字にまさると判じた所以であろう。その語意は、「咲きこぼれるひとむらの花が、錦織りなすように美しい。」であり、『碧巖錄』では「目もあやな華麗さの形容」として用いられているのである。⁽⁴⁵⁾中巖はしかし、この文言を「うわべばかりが美しく、中身が伴わない言葉。美辭麗句」の意味に用いていることが、前後の文脈から歴然としているよう。

中巖は、填詞（前稿「五山二留學僧の填詞製作」第二章参照）をも含めて、多量の詩文を遺したにもかかわらず、本條での彼は、純然たる禪者としての意識を堅持している。すなわちまず、宋代禪僧の柳詞耽溺の實例を紹介し、そのうえで、同時代のわが禪林がこの「弊風」に倣いつつある状況を、（如今諸方の長老は……）と前置きして慨嘆するのである。

結 語

中巖の詞話涉獵の幅廣さを概説的に提示すべく、今回はひとまず著名なテキストたる『四庫全書』本に據った。今後の課題としては、彼が披見したとおぼしい如上の詞話類（『能改齋漫錄』ほか）について、『四庫全書』以上の善本に徴しつつ、一層精緻な對照を圖りたい。その結果次第では、本稿第二章及び第三章（一）で記した所見は、あるいは補訂を迫られることとなるろう。今しばらくの猶豫をいただきたい。

また、中巖と同時代の禪林、さらには一般知識人階層における詞學的知識の普及度がどの程度のものであったかについても、筆者は今後さらに時間をかけて文獻調査を進めてゆきたい。ここに（一般知識人）としたのは、禪林（當時のわが

國における小中國）以外の世界に住まう知識人を指している。

例えば、淨土宗鎮西派の學僧・聖岡（しょうがい）（一三四一—一四二〇、東京小石川・傳通院開山）が著した『往生禮讚私記見聞』は、そうした一般知識人による詩學書のなかでも、とりわけ注目すべき存在である。聖岡は同書にて、善導の『往生禮讚』（韻文體による淨土宗の根本聖典）を註釋するに當たり、自己の詩學的知識を大いに發揮する。とりわけ、韻律上注意すべき詩句に關しては、一々その平仄を提示し、しかも所々に詩學的な設問と回答とを設けて、韻律はもとより、中國の詩史についても纒々所見を述べている。

しかしながら、こと填詞に關しては、彼の認識も正確とはい言ひ難い。この點、中巖の該博な知識とは好對照をなしている。

古體・新體の外、亦た江南ほかの風流ふうりゅうと云ふことあり。其れは文字言句も不定なり。周詩の三百是れなり。

（『淨土宗全書』第四卷・四七三頁上）

今回は原文所設の返り點・送り假名に依據した訓讀のみを掲げる。傍線⑤にいわゆる（江南の風流）とは、詞牌「憶江南」を指そう。これはわが兼明親王（九一四—九八七）の「憶

龜山二首⁽⁴⁾の所用詞牌をまなしており、填詞との縁薄きわが國民にとつては、比較的馴染みのある詞牌と言ふべきである。ただし一見「文字言句も不定」なようであつても、事實は歴史ある詞牌として、細かな平仄規定を有しているのである。したがつて、これを「周詩の三百」、すなわち『詩經』に散見される雜言古詩とは同日に談じ得まい。

註

- (1) 東京大學出版會、昭和四五年(一九七〇)。以下、『新集』と略稱。
- (2) 年譜形式の中巖の自傳——ただし老年期の諸條では、「予」に代わつて「師」が主語とされ、門人による加筆がなされたことを暗示——『自歷譜』では、數え四一歳の北朝曆應三年(一三四〇)に本書を撰述したと記している。『新集』・六二一頁。
- (3) 法常寺本(第三章第(一)節前出)の『藤陰瑣細集』・『文明軒雜談』は、玉村博士の「解題」に據れば、いずれも江戸期の禪巖文心によつて、「大略延寶から元祿の間になされたものと思」われる寫本である。『新集』・一二四二頁。それぞれの末尾の識語はともに、本寫本作成の當時、原本の首尾が既に失われていたことを傳えている。『新集』・四六三頁、四八七頁。
- (4) 註(2)前出・『自歷譜』の北朝應安元年(一三六八、中巖數え六九歲)及び同二年の條では、相次いで『文明軒雜談』に依

據しつつ、中巖の事蹟を記す(元年:「事見雜談」;二年:「雜談云」)。『新集』・六二九頁。前後の諸條では、既に「予」(中巖の自稱)に代わつて「師」が主語とされているから、これら兩條も、門人らの補筆に係らう。

- (5) 桐野好覺師「道元禪師と十二時歌」、『宗學研究』第四〇號所掲、曹洞宗宗學研究所、平成一〇年(一九九八)。

- (6) 森克己博士『日宋貿易の研究』、國立書院、昭和二三年(一九四八)。

- (7) 『日本における中國文學 日本填詞史』I・II、二玄社。Iは昭和四〇年(一九六五)、IIは同四二年。

- (8) 『文明軒雜談』433條では、數え六八歳の貞治六年(一三六七)に發生した天龍寺の火事を記している。それゆえ本書は、中巖の著作としては、比較の後期の成立と推知される。

- (9) 『新集』・四七〇頁。

- (10) 臺灣商務印書館版『景印文淵閣四庫全書』第八五〇冊・八一〇頁下。

- (11) 『景印文淵閣四庫全書』第一四八〇冊・三七八頁下。なお、本條における出典究明に當たつては、劉石博士の『蘇軾詞研究』に負うところが大きであつた(『大陸地區博士論文叢刊』所收、臺北・文津出版社、民國八一年(一九九二))。

- (12) 『全宋詞』第一卷・二八二頁上(唐圭璋氏編、中華書局、一九六五年)。なお、宇野博士『中國古典詩歌の手法』(第三章第(一)節前出)では、第一部第一章「柳永研究序説」にて、本篇に據つて蘇軾を豪放派とする從來の見解が一面的であることを、

柳詞との關聯において詳述している。同題論攷の初出は、『早稻田大學文學研究科紀要』別冊第九集、昭和五八年（一九八三）。

(13) 神田博士註（7）前掲書Ⅰでは、『普門院經論章疏語錄儒書目錄』を紹介する（五七頁）。同『目錄』に列擧された書籍の大半は仁治元年（一二四〇）、圓爾が宋から齎したものである。同『目錄』は北朝文和二年（一二五三）の作成に係るから、所掲書籍たる『注坡詞』・『東坡長短句』の本邦請來は、この一世紀中のことと見られよう。

(14) 研文出版、平成三年（一九九一）。

(15) 『中國古典文學基本叢書』所收、中華書局、一九九四年。以下、薛教授『校註』と略稱。なお、「跋尾」に據れば、本書の執筆自體は「己巳、庚午冬春間」、すなわち、一九八九—九〇年のことである。

(16) 『海外漢學叢書』所收、上海古籍出版社、一九九八年。譯者は張海鷗・羊昭紅兩氏である。

(17) 『全宋詞』第一卷・二九頁上。

(18) 『全宋詞』同右・四七頁下。

(19) 『全宋詞』同右・四三頁上。

(20) 註（14）前掲書・二四〇頁、二五七頁、二五二頁。「柳永所用詞牌一覽」より。本「一覽」の初出は、中國詩文研究會『中國詩文論叢』第八集、平成元年（一九八九）。

(21) 薛教授『校註』では、『後山詩話』の逸話（『文明軒雜談』399條の出典）も、『澠水燕談錄』のそれ（400條傍線③の出典）も、と

中巖圓月の宋詞紹介（野川）

もに本篇に關聯するものと判じている（二一五頁「附考」欄）。

(22) 『新集』・四七一頁。

(23) 『新集』・一四頁所掲の「凡例」。

(24) 『中國古代詩話詞話辭典』六頁。本書は張葆全氏主編、廣西師範大學出版社、一九九二年。

(25) 『景印文淵閣四庫全書』第一四七八冊・二八六頁上。

(26) 『景印文淵閣四庫全書』第一四八〇冊・六四八頁下。

(27) 中華書局、一九八一年。本書は歐陽修『歸田錄』（李偉國氏標點・校訂）との合本である。

(28) 『景印文淵閣四庫全書』第一〇三六冊所收。

(29) 註（27）前掲書卷頭の呂氏「點校說明」に據れば、呂氏はいわゆる涵芬樓本（一〇卷本）を底本としたが、『四庫全書』本は最終卷を缺いた九卷本に據っているという。

(30) 註（29）前出「點校說明」。

(31) 註（27）前掲書・一〇六頁。

(32) 『四庫全書』本卷頭の「提要」では、本書の「記す所質實にして信ずべき」だとしながらも、微瑕の一つとしてこの「仁宗大悅」を挙げ、史實はコネで官職を得んとした柳永が「仁宗の斥くる所と爲」ったのだとしている。註（28）前掲書・四七〇頁上。

(33) 註（24）前掲書に據れば、本書は嚴有翼が南宋初期の紹興年間（一一三一—一一六二）に撰述したという（二五頁）。

(34) 註（25）前掲書・六四八頁下。

(35) 『全宋詞』第一卷・四七頁下、薛教授『校註』二二六頁。後者の「校記」欄には何ら言及を認めず。

中國文學研究 第二十六期

(36) 『景印文淵閣四庫全書』第一〇三七冊・四〇七頁下。なお、本書の著者・趙令時の傳記は、『宋史』卷二四四に掲ぐ(中華書局版標點本第二五冊・八六八—二頁)。

(37) 註(10) 前掲書・八一〇頁下。

(38) 『新集』・四七一頁。

(39) 『大正新脩大藏經』第五一卷・六三七頁c—八頁c。なお、『續傳燈錄』は、明初の圓極居頂(?)—一四〇四の撰述に係る。

(40) 『禪月集』卷二三、『景印文淵閣四庫全書』第一〇八四冊・五三頁上—六頁上。なお、『禪月集』では、本篇のほかにも「山居」の題を有する作品が散見されるが、いずれも單作である。

(41) 『大正新脩大藏經』第五〇卷・八九七頁a—b。

(42) 『禪月集』卷一九、註(40) 前掲書・五〇〇頁下に韋莊が貫休に與えた七律「寄禪月大師(譯題：禪月大師に寄す)」を掲げ、かつ、貫休がこれに次韻して成った「酬韋相公見寄(譯題：韋相公の寄せらるるに酬ゆ)」を附す。兩者に對する語釋は、李誼氏の『韋莊集校注』四六五—六頁所掲(四川省社會科學院出版社、一九八六年)。

(43) 金・志明撰、元・德諫註『禪苑蒙求』中卷所掲。『新纂大日本續藏經』第八七卷・九〇頁c。現代語による逐條説明は、駒澤大學編『禪學大辭典』上卷・二八八頁を参照(大修館、昭和五三年(一九七八))。

(44) 『大正新脩大藏經』第四八卷・一五三頁a(卷第二)及び一九三頁b(卷第七)。前者は第二二則「洞山麻三斤(譯題：洞山の麻三斤)」の頌句で、雪竇重顯(九八〇—一〇五二)の言葉であ

る。一方、後者は第六一則「風穴若立一塵(譯題：風穴若し一塵を立つれば)」の本則への著語であり、圓悟克勤(一一〇六—一一三五)『碧巖錄』現行本の作者でもある)の言葉である。

(45) 『禪語辭典』四五頁上、入矢義高博士監修、古賀英彦教授編著、思文閣出版、平成三年(一九九一)。

(46) 『本朝文粹』卷一所收。『新日本古典文學大系』第二七卷・一三五頁上(大曾根章介・金原理・後藤昭英三氏校訂、岩波書店、平成四年(一九九二))。なお、神田博士註(7) 前掲書Iは、その第三章を本篇に關する説明に充てる。

(47) 以下の二つの清代の詞學書を参照されたい。①賴以邨の『填詞圖譜』卷二「雙調望江南」の項では、この詞牌が元來單調であつたが、宋代以降雙調になつたと説き、その平仄式を掲ぐ。②毛先舒の『填詞名解』卷三「法曲獻仙音」の項では、詞牌「望江南」の單調が、すなわち「憶江南」であると説く。右記兩書ともに、康熙一八年(一六七九)成立の查繼超『詞學全書』所收。筆者は陳果青・房開江南氏の校訂本に據つた(貴州人民出版社、一九九〇年)。①は同校訂本二六一—二頁を、②は四一—二頁をそれぞれ参照。